

新発田の城と城下町施設の配置形態に関する考察

油 浅 耕 三*

(平成14年10月31日 受理)

A Study On Institution Arrangement Form Of Castle And Castle Town in Shibata

Kouzou YUASA*

This paper, from the side of the maps of castle and castle town, deals with the institution of castle and castle town in Shibata. The Shibata was castle and castle town which has 50,000 "Koku" (180 liter) of rice in Edo-era in Japan. On the whole, the site of institution selected from the side of the use and scale of building. As the results of this study, the striking point are as follows: (1) The "Machi-yasiki" (tradesmen and artisans) zone have a lot of the wooden bridge. (2) In the Shibata castle town, the "Toki-no-kane" (hour telling bell), thinks the "Two". (3) The arrangement of the "Na-gaya" (terraced houses) have no relation in a point the direction.

Keywords: Shibata, institution arrangement form, castle, castle town,
maps of castle and castle town

1. 緒 言

いうまでもなく、今日の、日本の現代都市の多くが、近世に誕生した城下町に淵源を持っている。そしてこの城下町は、その展開を通して様々な施設を造りだしてきている。

本研究は、当時の城や城下町を描いた絵図を個々の町ごとに収集し、各施設がそれぞれの町において、いつの時代にどこにどのような考えに沿って設置され、その位置に配置されたのかを考察する。

城下町での生活と施設との関係性を理解し、今日の、地域施設のあり方を考える上での基礎資料に繋げようとするものである。

従来、かかる視点での考察がなく、個々の城と城下町について施設配置の考え方の積み重ねが必要である。ここでは、越後の新発田を取り上げることとした。

2. 研究の方法

*建築学科 教授

城や城下町の絵図にみられる個々の施設は、当時の城や城下町での規模や位置関係を伝えているところに特色をもつ。同時にまた、施設の屋敷の規模や形状、あるいは向きや周辺環境を伝えている点でも重要な意味をもつといえる。

かかる視点に立って、新発田の城と城下町絵図を収集し、各絵図に描かれた施設内容を総合し、藩政時代の史料とも対応させつつ各施設の配置上の特質を考察してゆきたい。

3. 城絵図と城下町絵図

管見する新発田の城と城下町絵図を整理したのが「Table 1」である。江戸時代の初期・

Table 1 The maps of Shibata castle and castle town

| | 名称 | 年代 | 所蔵 | 大きさ(cm) | 備考 |
|------------------|----------------------|---------------------------|---------------------|-------------|----|
| 城 図 | ① 『寛文四年之絵図城下外略し(絵図)』 | 寛文4年(1664) | 新発田市立図書館 | 79.5×56.0 | |
| | ② 『新発田城之図』 | 正徳2年(1712) | 新発田市立図書館 | 55.5×80.0 | |
| 城 下 町 図 | ③ 『越後国新発田之城絵図』 | 正保2年(1645)頃 | 国立公文書館 | 246.0×181.0 | 彩色 |
| | ④ 『御家中絵図』 | 正保2年～3年頃 | 新発田市立図書館 | 159.0×227.5 | 彩色 |
| | ⑤ 『正保絵図』 | 正保2年～3年頃 | 清水園 | 152.0×224.0 | 彩色 |
| | ⑥ 『新発田町屋図』 | 享保13年(1728) | 新発田市立図書館 | 軸物 | 彩色 |
| | ⑦ 『新発田町屋図』 | 延享元年(1744) | 新発田市立図書館 | 軸物 | 彩色 |
| | ⑧ 『新発田町屋図』 | 寛政(1650頃)～ 文化(1805頃) | 新発田市立図書館 | 軸物 | 彩色 |
| | ⑨ 『新発田御城下町家図』 | 文化3年(1806) | 新発田市立図書館 | 軸物 | 彩色 |
| | ⑩ 『家中屋敷図』 | 嘉永年間(1850頃) | 新発田市立図書館 | 100.0×168.0 | 彩色 |
| | ⑪ 『新発田家中絵図』 | 正保2年(1645)頃 | 新発田市立図書館 | 269.0×298.0 | 彩色 |
| | ⑫ 『越後柴田』 | 万治元年(1658)～ 貞享元年(1684) | 広島市立中央図書館 (浅野文庫) | 『諸国当城之図』 | 彩色 |
| | ⑬ 『御家中絵図』 | 享保8年(1723)～ 享保9年 | 新発田市立図書館 | 190.0×262.0 | 彩色 |
| | ⑭ 『幕末絵図』 | 弘化～嘉永頃(1845頃) | 清水園 | 110.0×132.0 | 彩色 |
| | ⑮ 『新発田藩家中屋敷図』 | 年代不詳(明治初年) | 新発田市立図書館 | 軸物 | 彩色 |
| | ⑯ 『城下家中屋敷割図』 | 年代不詳 | 溝口伊織 家 | 172.0×269.0 | 彩色 |
| | ⑰ 『新発田町古絵図』 | 年代不詳 | 新発田市立図書館 | 軸物 | 彩色 |

中期・末期の絵図が存在し、町絵図も中期・末期のものがみられるなど、全体としては多くの絵図が伝えられているといえる。

新発田城は、慶長3年（1598）、溝口秀勝が5万石で入城する。以後子孫相継いで明治に至っているが、溝口氏のように、271年もの長きに亘って同じ城を居城とするのは、全国の大名の中でもまれな例といえる。

4. 施設の種類と配置形態

各施設内容を城（「Fig. 1」）と城下町（「Fig. 2」）に分けてみてゆくこととしたい。

★蔵屋敷 ④・⑤でみられる。城の建設当時には、各種の蔵が内郭の中に位置づけられており、新発田も同様と判断される。⑬では、この部分は「御花畠」となっている。

★大工小屋 ④・⑤でみられるが、本丸側に位置している。城内の作事にかかわる屋敷も城の完成時にみられる屋敷で、城に対する考え方の藩政初期の性格と考察される。⑬では、この屋敷部分は「武具御土蔵」と書き込まれている。

★鍛冶小屋 ④・⑤にある。大工屋敷と同様の施設として配置の性格を考えるべきである。本丸より外側に位置しているのは、火事の点を考えてのこととみることができる。

★花畠 ④・⑤で確認できる。城内には、各城に花畑を設けていることが多い。本丸の堀側に設けられているのは、建物の間を避けたことも考えられる。⑬では「御賄蔵」とある。

★土取場 ⑬でみられ、二丸の本丸側（堀側）にある。位置が道に面しているのは、土取の作業と運搬に係るものとみられ、大工小屋との関わりが考えられる。城下町の南東部分の端にも⑬に土取場がみられる。

★橋 城の内郭部分は、本丸に架かる大手橋と搦手側の木橋を除いて、全て土橋である。また、町屋敷の部分は、いずれも木橋で⑨では25を伝えており数が多い。土橋は地続きと同様であり、木橋は不安定な橋として建設当初より軍事面で考えられた配置とみられる。

★番所 城では、三丸と二丸を繋ぐ部分、城下町と三丸を繋ぐ部分に見られる。城下町では、本町通の上と下の部分に見られる。城や城下町では、一般的な施設配置といえる。

★講堂 新発田藩で講堂を建設したのは安永元年（1772）というが¹⁾、⑭で確認でき④では高禄の侍屋敷となっている。この屋敷地は、④以降に空き屋敷となったところである。藩主の講堂設立の意向¹⁾との関係の中で、二丸西側の配置になったと考えられる。

★御用屋敷 ⑬にみられる。④・⑤では重臣の侍屋敷である。本丸の表御門に近い位置で、藩の御用に対応する施設として、④・⑤以降に侍屋敷の本丸に近い部分が分割されたと考えられる。

★時の鐘 ⑭には、本町通の下町の城側にみられる。元禄8年（1695）7月1日より月撞き始め²⁾という。二丸の西南部に時の鐘と同様の書き込みが見られる。時の鐘が、城絵図や城下町絵図に具体的に描かれることはきわめて稀なことといえる。

★旅長屋 二丸の三丸側にある。二丸と三丸繋ぐ中之御門の二丸側で、④・⑤では、空屋敷となっている。中之御門の番所の本丸側で、各丸を繋ぐ道路に面した溜まりの道路部分である。城外への旅に関わる長屋の必要性が、この時代、かかる位置を選択したとみられる。

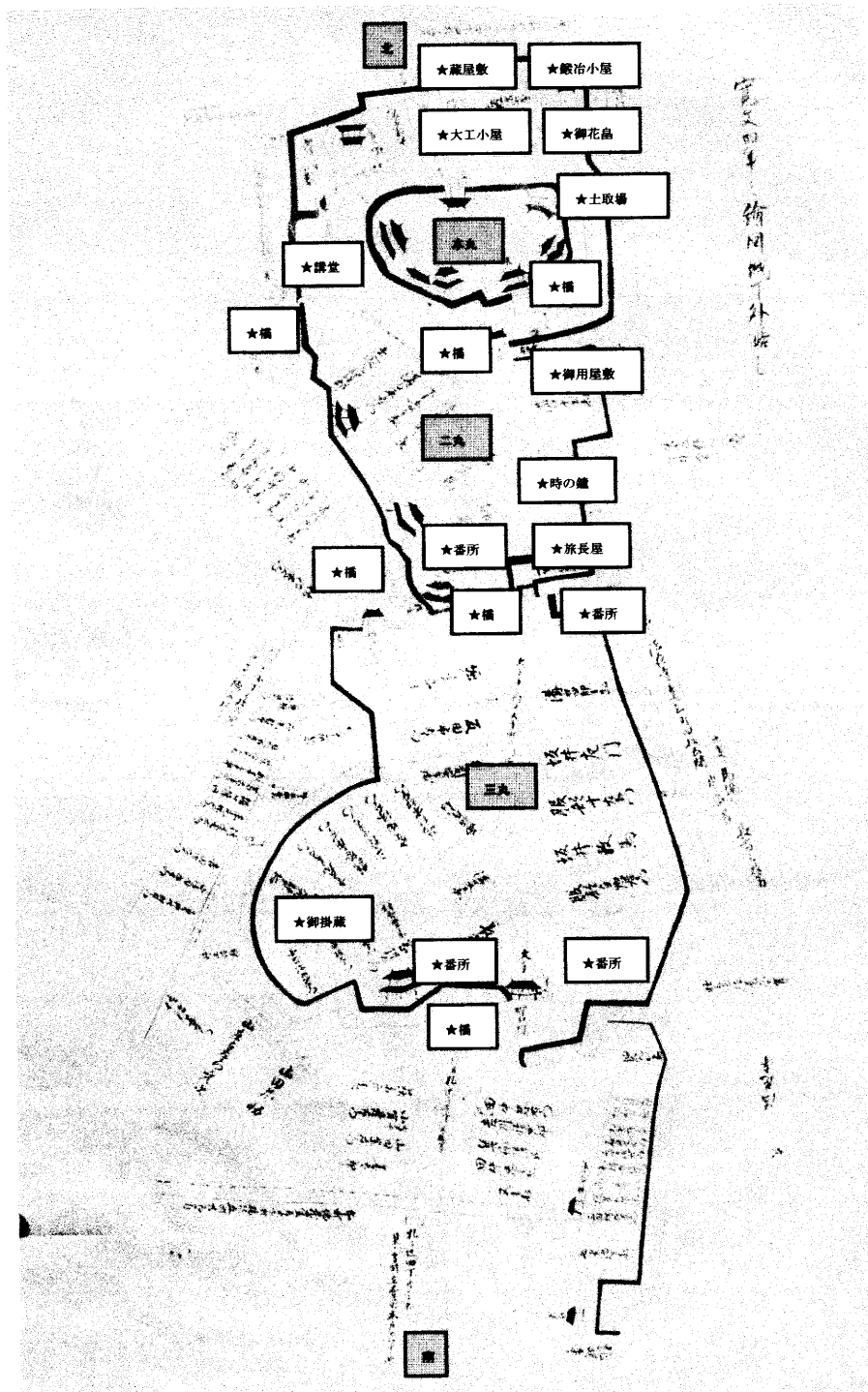


Fig. 1 “Kanbun-yonen no Ezu Jouka soto-ryaku-si”
(possession of the Shibata municipal library)

★御掛蔵 ⑬以降の絵図で三丸の東南隅（堀側）に確認できるが、④・⑤では高禄の侍の屋敷割がみられたところである。この施設が経営面で必要とする屋敷規模とともに藩の施設としての側面が位置の決定に関わっていたとみられる。

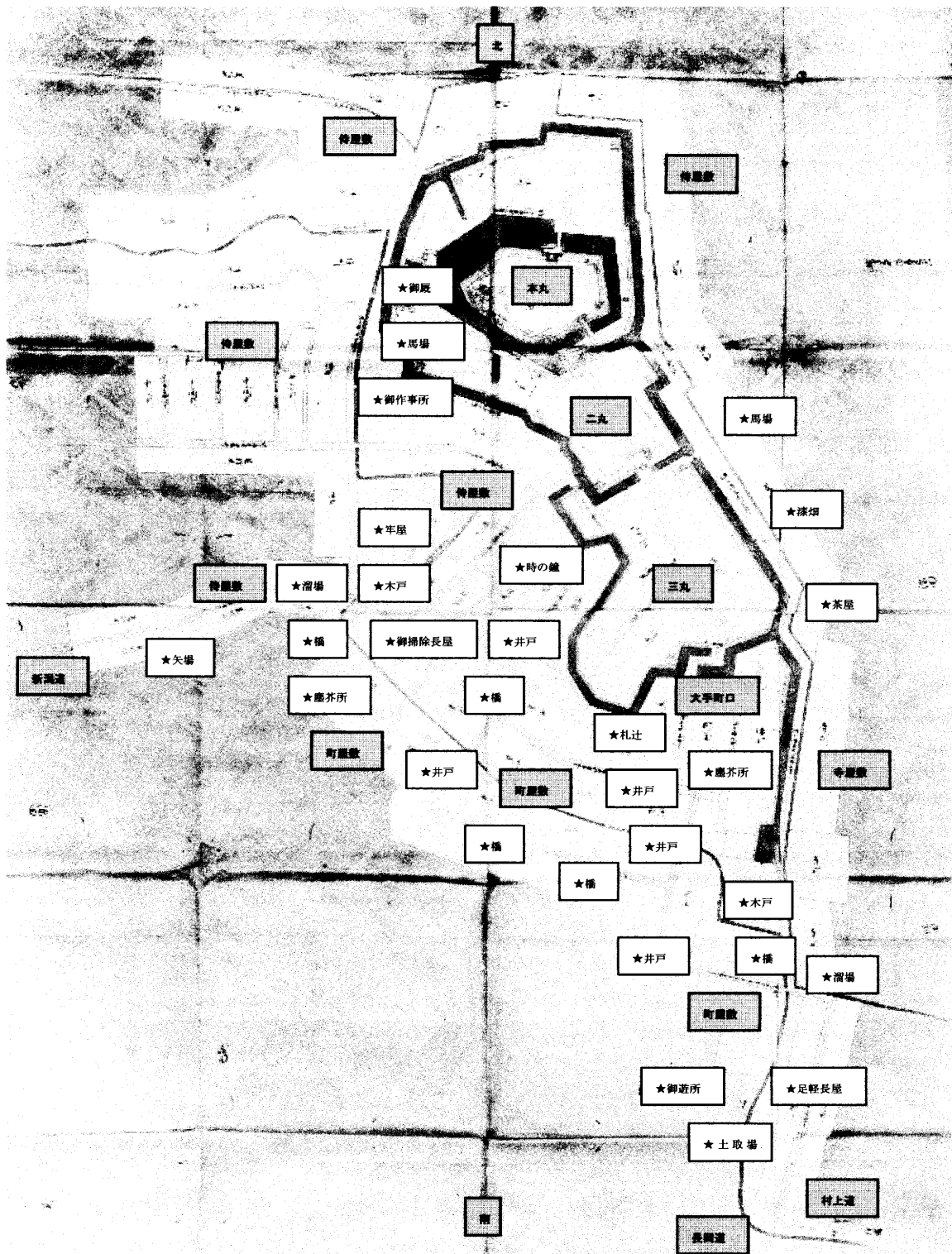


Fig. 2 “Echigo-no-kuni Shibata-no Shiro Ezu” (possession of national officialdocument library)

★札の辻 ③・④ほかの絵図で確認できる。他の城下町と同様の位置で、新発田では、大手道と本町通りが交差する部分にみられ、以後、位置に変化はない。

★木戸 町屋敷の周辺部には、木戸が設けられていた。特に本町の上と下には大木戸が置かれており、他の城下町と同様の配置といえ、⑥・⑦・⑧で確認できる。

★溜場 諏訪神社前と下町の町屋敷と足軽屋敷との繋ぎ部分には、④・⑤の後に溜場が設けられ、⑧・⑬で確認できる。この溜場は、人の流れに関わるもので分散した配置となる。

★御厩 ④・⑤・⑬・⑭で確認できる。二丸の西御門に繋がるこの位置は、侍屋敷の中央部にもあたり、藩政当初よりの配置計画と考えられる。

★馬場 ④・⑤以降の絵図でみられる。江戸時代初頭は、三丸の東側（堀外）のみであったが、後に二丸の西側（堀外）に造られた馬場は元禄元年（1688）という³⁾。三丸の部分は、長い直線形の堀に沿っており、周辺の屋敷がいずれも侍屋敷で、かつ内郭と繋がる門が存在している点を見ると、堀割と一体的に考えられたとみることができる。また、二丸部分の馬場は、城下町建設当初より計画されたとみられる御厩との関係において隣地に設けられたとみることができる。

★作事所 ⑬・⑭でみられる。④・⑤では「馬屋」のみの書き込みである。二丸の北側の大工小屋が、藩の馬屋との関係を念頭において、この位置に移転したとみることができる。川と堀を繋ぐ出丸の堀外にみられる。

★井戸 侍屋敷には井戸の表現はみられないが、⑥・⑦・⑧に、町屋敷部分に5ヶ所の井戸を表現し、同時に「御作事御普請」の書き込みがある。町屋敷の全体での使い勝手を意識した配置で分散した配置といえる。なお、本丸の御殿の平面図を描いた『新発田城中御間柄全図 四百分ノ一』（新発田郷土研究社昭和9年刊）がみられ、御殿内に4ヶ所、御殿外に4ヶ所の井戸らしき表現が、それぞれ分散した形でみられる。この絵図は、何かを写したといえるほど内容表現が具体的であるが、絵図の作成経緯や年代の書き込みがみられない。ここでは、絵図の存在を紹介するにとどめておきたい。

★塵芥溜場 町屋敷では、天保7年14ヶ所の塵芥溜場の設置を伝える⁴⁾。町屋敷に分散された形で、かつ、長屋脇・裏手などわずかな屋敷地での配置といえる。

★牢屋 ④・⑤でみられるが、⑬では「籠」とあり、⑭でも確認できる。他の屋敷で囲まれた形になっており、屋敷の周辺を水で囲んだ形となっているが、大垣⁵⁾や高田⁶⁾と同様、周辺の世界と隔離した計画上の考え方といえる。

★漆畑 ④・⑤では、「馬場」の表現となっているところに、⑬で「漆畑」が見られる。馬場の屋敷が1部畑地として変化しており、注目しておきたい。

★茶屋 城下町の東端にあり屋敷の表側を江筋が流れ、④・⑤で確認できる。⑬以後の絵図ではみられず、⑫で「御遊所」⑬で「清水谷」と書き込みのみみられる下屋敷に組み込まれたと考えられる。

★御遊所 城下町の南東部で、④・⑤で確認でき新発田川の上流にあたる。元は、高德寺（曹洞宗）の寺屋敷で、万治元年（1658）の移転後、寛文6年（1666）清水谷御殿として成立する⁷⁾ところである。水との関係での配置がうかがえ、⑬以降で確認できる。

★足軽長屋 ⑬では侍の屋敷割りがみられる。⑭では長屋が南北方向を向いて4棟みられる。屋敷形に沿った配置で、西日があたる長屋配置である。現状において国の重要文化財に指定されている長屋は、4棟の内の北から2棟目で、西面して建てられていることが、

あげられている⁸⁾。

★御掃除長屋 城下町南西（職人町の端）にある。④・⑤ではみられないが、⑧では「御用地」の書き込みがある。施設の性格と屋敷地との関係での配置と考えられる。

★矢場 ⑬で1箇所確認できる城下町西端部の矢場は、城下町外周部の外に土井で囲まれた形となっている。後の時代に設けられたことも考えられる。

5. 結 言

各施設は、城との位置関係、水との関わり、城下町の生活空間の使い分けにおける結節点での必要性にもとづく施設そのものもつ性格、侍屋敷・町屋敷・寺屋敷・神社屋敷との関係など、いくつかの側面を踏まえる中で、最終的には配置が決定されているといえる。

この新発田では、新発田川や江筋にかかる木橋が多いこと、時の鐘が2ヶ所存在していたこと、長屋の建物の向きは、方位との関わりなく計画されていたことをあげておきたい。

謝 辞

関係資料の調査にあたり、独立行政法人国立公文書館、新発田市立図書館、清水園のご高配を頂いた。記して深く感謝申しあげる次第である。

文 献

- 1) 新発田市史編纂委員会編：『新発田市史・上巻』，新発田市役所，1980．11，p．590．
- 2) 新発田市史編纂委員会編：『新発田市史・上巻』，新発田市役所，1980．11，p．554．
- 3) 新発田市史編纂委員会編：『新発田市史・上巻』，新発田市役所，1980．11，p．552．
- 4) 新発田市史編纂委員会編：『新発田市史・上巻』，新発田市役所，1980．11，p．573．
- 5) 油浅耕三：大垣の城と城下町施設の配置形態に関する考察，地域施設計画研究，17，日本建築学会，1999．7，p．116．
- 6) 油浅耕三：高田の城と城下町施設の規模と配置形態に関する考察，地域施設計画研究，20．7，日本建築学会，2002．7，p．389．
- 7) 新発田市史編纂委員会編：『新発田市史・上巻』，新発田市役所，1980．11，p．555．
- 8) (財)文化財建造物保存技術協会編『重要文化財旧新発田藩足輕長屋修理工事報告書』，重要文化財旧新発田藩足輕長屋修理委員会1972．6，p．1．